

# 常松大谷遺跡 つねまつおおたにいせき

## & 常松菅田遺跡 つねまつすがたにいせき



### 常松大谷遺跡で田んぼが 見つかりました!

つねまつおおたに  
常松大谷遺跡で調査も終盤に近づいたころ、弥生時代後期（約 1,800 年前）の田んぼが見つかりました。東から西へと開く谷間の高低差を上手く利用するように、畦を造って田んぼを小さく区画しています。まるで、棚田のような景観です。

また、田んぼの中からは、ふた抱えほどの立木の跡が見つかりました。暑い夏には、涼しい木陰として利用していたのかも知れません。

弥生時代の人々は、谷を流れる水を引いて田んぼを作り、自然に生えている木も上手く利用していたのでしょうか。



立木の跡。  
大きく根が張っているのが分かります。



見つけた田んぼです。  
畦で約 4m 四方に小さく区切られています。

田んぼの上の土を薄く削って行くと、田んぼの面よりも盛り上がった、畦の部分だけが畚状に見えます。



畦

立木

# 下坂本清合遺跡 しもさかもとせいごういせき

## あーした天気にな〜あれ!



しもさかもとせいごう  
下坂本清合遺跡では、鎌倉時代（約 800 年前）の川の中から、2 種類の下駄が出土しています。足を乗せる台と歯を一つの木から作る「連歯下駄」と、別々に作った歯を台に差しこむ「差歯下駄」です。連歯下駄の歴史は古く、その出現は古墳時代（約 1,600 年前）までさかのぼります。差歯下駄は 12 世紀に入ってから現れるようで、ちょうど下坂本清合遺跡の時代と重なります。

同じ時代に活躍していた牛若丸と弁慶も、きっとこれらのような下駄をはいていたのでしょうか。



表側



裏側

「連歯下駄」(写真手前)と「差歯下駄」(写真奥)。差歯下駄は縦半分に割れています。

# 鳥取西道路の遺跡を掘る!

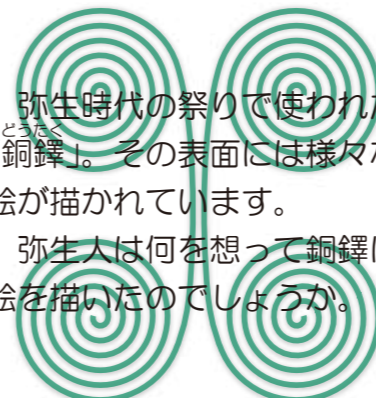
第 56 号 2013 年 12 月 24 日

平成 25 年度に発掘調査を行った遺跡の位置



弥生時代の祭りで使われた「銅鐸」。その表面には様々な絵が描かれています。

弥生人は何を想って銅鐸に絵を描いたのでしょうか。



## 銅鐸に描かれた想い

『鳥取西道路の遺跡を掘る!』第 51 号では、松原田中遺跡で弥生時代の青銅器「銅鐸」の破片が見つかったことをお知らせしました。出土した破片に文様は確認できていませんが、銅鐸の中には絵が描かれたものもたくさんあり、そういった銅鐸は「絵画銅鐸」と呼ばれています。

絵画銅鐸は鳥取県内でも見つかっていて、昭和 8 年に泊村（現在の湯梨浜町）で出土した銅鐸には、鹿やトンボなどの絵が描かれています。また、県外に目を向けてみると、おとなり兵庫県神戸市で発見された銅鐸 14 点には、鹿のほかに水鳥や亀（またはスッポン）、杵と臼で脱穀する人などが描かれているものがあり、国宝になっています。

どちらの銅鐸にも鹿が描かれていますが、鹿は弥生時代の絵画にもっとも多く登場する動物で、春に生え始め秋にかけて成長する角が稲の成長時期と重なることから、当時の人々は鹿を田んぼの神様として祀っていたという説もあります。また、農作物につく害虫を食べてくれるトンボ、水の豊かさを象徴する水鳥や亀などが描かれていることなどからも、これらの銅鐸に描かれた絵は農耕に関するものだとする説が一般的です。

弥生時代の人々は、農作物の豊作を祈ってこれらの絵を銅鐸に描いたのでしょうか?

みなさんは、銅鐸の絵画にどんな想いが込められていると思いますか?

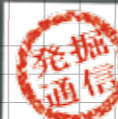


鳥取県泊村出土の銅鐸 高さ：42.7cm  
(画像提供：東京国立博物館)

(公財) 鳥取県教育文化財団  
調査室

〒680-1133  
鳥取市源太 12 番地

TEL : 0857-51-7553  
FAX : 0857-51-7550  
メールアドレス :  
tottori-kyobun@kyobun.  
sakuratan.com



12 月も終盤を迎え、ほとんどの遺跡では発掘調査が終了しました。これからは、図面や出土遺物の整理、報告書の作成などで大忙しです。調査の成果はどんどんお伝えしていきますので、来年も『鳥取西道路の遺跡を掘る!』をよろしくお願ひします。

それではみなさん、よいお年を!

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

# 桂見鍋山遺跡

かつらみなべやまいせき

## 調査は終わる。謎は残る。( ; 0 ; )



先月号でお伝えした水田の層を掘り下げると、川の跡がいくつも見つかりました！発掘調査は、その川跡の掘り下げを行った後に川跡の形やその埋まりかたなどの記録を作成して終了しました。

2ヶ年度にわたる桂見鍋山遺跡の発掘調査によって、遺跡周辺が古墳時代の初め頃に水田として利用されていたことが、田んぼの畦や、田下駄などの農具が見つかったことで明らかになりました。しかし、田んぼを耕作していた人々はどこに住んでいたのでしょうか？近くに居たとは思いますが。

桂見鍋山遺跡の発掘調査は8月の下旬に始まり、11月下旬には終了するという慌ただしいもので、思い返せばアツという間の3ヶ月でした……。これからは、室内で整理作業を行っていきます！



# 良田中道遺跡

よしだなかみちいせき

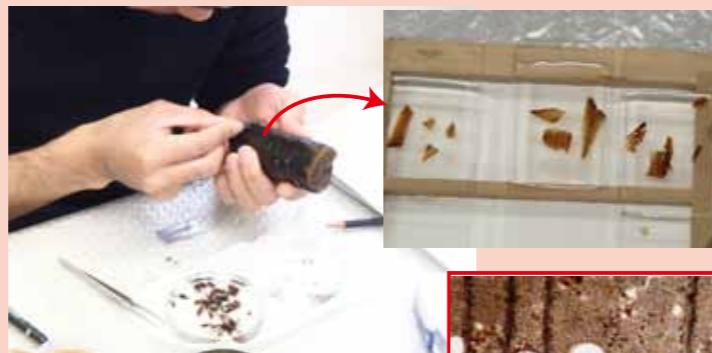
## ミクロの世界をのぞいてみよう♪

11月末で良田中道遺跡の発掘調査は終わりました。現在は室内に場所を変え、見つかった土器や木製品などを洗ったり、くっつけたりといった整理作業をしています。

このうち、木製品（自然の木片も含む）については「樹種同定」を行っています。樹種同定とは木材の細胞の形や並び方などの特徴から木の種類を特定する方法で、細胞を観察するためにカミソリで紙よりも薄く削って試料を採取します。

木の種類を確認することによって、良田中道遺跡の周辺でどんな木が生えていたか、どんな木をどんな道具に加工していたか、などを知る手がかりとなります。

どんな分析結果がでるのか、今から楽しみです！



参考：ケヤキの横断面顕微鏡写真



# 金沢坂津口遺跡 & 松原田中遺跡

かなざわさかつぐちいせき まつばらたなかいせき



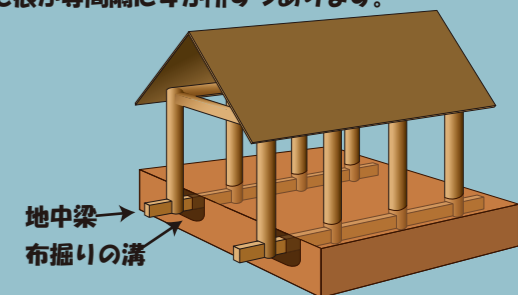
## 「地中梁」をもつ大型倉庫発見！！

12月13日に松原田中遺跡3・4区の調査が終了しました。弥生時代中期～古墳時代前期（約2,200～1,700年前）の遺構がたくさん見つかり、その数は1,000点を超えました！！  
たくさんの遺構のなかでも、特に目を引くのが5棟見つかった布掘りの掘立柱建物跡です。普通の掘立柱建物は穴に柱を1本ずつ立てていきますが、布掘りの場合は建物の長辺に平行する溝を掘り、そのなかに柱をいくつか並べて据えた後、溝を埋め戻して柱を立てます。

このうち一番大きい建物跡は、「地中梁」という大型の角材を溝に埋めて梁の上に柱を立てた特別なつくりだったことが分かりました。地中梁を使ったことが分かっている古墳時代以前の建物は、全国的に見ても数例しか知られていません。このムラに住んでいた人たちが、どうやってその工法を知ったのか、なぜこの工法を使ったのか、わからないことがたくさんです。これから似た例を調べて、その謎を少しでも解明していきたいと思います。



地中梁が出土した様子。一辺約20×15cm、長さ約7.3mの角材が2本平行に並んでいます。地中梁には柱がはめ込まれていた痕が等間隔に4か所ずつあります。



地中梁をもつ建物の想像図

# 松原田中遺跡 (1区)

まつばらたなかいせき



低い場所は田んぼ以外にも使えるからね♪

## くぼ地は絶好のゴミ捨て場？！

調査区北西隅で弥生時代前期の終わり頃から中期の初め頃（約2,300年前）の木製品が大量に出土しました。

調査区北西隅は北側および西側に向かって土地が低くなり、くぼ地になっています。また、木製品は水辺に生えていた植物が腐って堆積した土から出土しており、当時この辺りは湿地だったことがわかります。

出土した木製品の多くはボロボロになった角材や板材、枝打ちされた細い丸太材です。中には鍬や鋤（スコップ）、皿などもありますが、ほとんどが未製品や破損品であるため、ゴミとして捨てられたもののようです。

もちろん、弥生人にとってはゴミでも、当時の暮らしぶりを知るための貴重なお宝には違いありません。



▲水を含んだ黒色の腐植土から木製品が出土した状況（北東から）

◀皿と鍬